

## 第2分科会「失敗しないセカンドキャリアデビュー ～人生二期作・二毛作～」

コーディネーター：松田 智生（株式会社三菱総合研究所プラチナ社会研究センター主席研究員  
・チーフプロデューサー）

パネリスト：

白井 清  
中村 昌子  
栗原 邦夫  
黒笹 慈機

【松田】 改めまして、皆様、こんにちは。三菱総研の松田です。今日は、この分科会では人生二期作・二毛作ということテーマに、既にそういった二期作・二毛作を実践されているアクティブシニアの方から報告をしていただいて、後半はパネルディスカッションをしたいと思っております。主題は「失敗しないセカンドキャリアデビュー」ということですけれども、新しいセカンドキャリアをやろうと思っても、なかなかうまくいかない人も少なくないということです。



そのために何が必要なのかということ、それから、人生の生き方というのは二期作と二毛作があるということです。二期作というのは、米なら米、麦なら麦を作りますけども、今まで同じキャリアをやっていた人が、自分のキャリアの延長線上でセカンドキャリアを築く場合が二期作。二毛作というのは、米と麦とか、米と何とかみたいな、違ったものを作る。それはセカンドキャリアの中で今まで自分が数十年働いてきたフィールドと全く違うことにチャレンジするのが二毛作ということでございます。私自身は三菱総研で超高齢社会の地域活性化あるいはアクティブシニア論を研究しています。内閣府の高齢社会フォーラムの企画員を2年続けておりまして、去年に引き続き、この分科会を持つということでございます。

### 失敗しないセカンドキャリアデビュー

### 人生二期作・二毛作

株式会社 三菱総合研究所  
プラチナ社会研究センター  
主席研究員 松田智生

### 今日のキーワード

- ◇生きがい
- ◇25%
- ◇60歳
- ◇浪平とフネの年齢

では、パネリストの発表の前に、問題意識を幾つか紹介いたします。今日、ここに書いてあるのが非常に重要な問題意識ということで、セカンドキャリアをするに当たって大事なものは、やはり生きがいなのです。皆さんが生きがいを持って次の人生を楽しむということです。多分、皆さんあると思うのです、自分が生きがいを感じる瞬間というのが、どういうときにありますか。

【松田】 いいですね、リラックスしてきましたね。

どうですか。どういうときに生きがいを感じますか。

【質問者】 やっぱり人に喜んでもらったときですね。

【松田】 多分、皆さんが生きていて、そういう生きがいとかモチベーションを感じる瞬間はたくさんあるわけです。だから、生きがい、モチベーションというのが今日のキーワード。

生きがいというと、今日、ここで話す私やパネリストの生きがいも大事なのです。今日、皆さんがしらっと聞いていると、私の生きがいも生まれません。何か腕とか組んでいて、目をつぶったりしていると、はとがっかりするわけです。途中でスマートフォンとかいじっていると、見ていて結構むかついてくるわけです。だから、今日、皆さんにお願いがあるのは、話していて、そうだなと思うときは大きくうなずいてください。そうすると、我々のモチベーションも上がります。本当にそうだなと思うときには、2回こうやって大きくうなずいてください。よりモチベーションが上がる。そうでないときも、1分に1回ぐらいうなずくと。

次のキーワードは25%。これは、今日のフォーラムを考える中で非常に重要なキーワードです。何の数字でしょうか、25%って。どうですか。25%。

【松田】 高齢化率。そう。別の会合で聞いたら、体脂肪率と答えた人がいましたけども、これは日本の高齢化率。世界で1番です。先月、中国に出張に行きましたけど、中国は10%。その前の月はフィリピンに行きましたけど、フィリピンは1桁ですよ。日本は4人に1人が65歳以上というから、世界で断トツなんです。じゃあ、それが悪いのかと。僕はそうは思わない。多くの人がやはり65歳を超えても元気だろうということです。だから、ピンチをチャンスに変えるという発想の転換が大事だということ。

2つ目には、60歳。これは何の数値か。どうでしょう。今、雇用延長して60歳から65歳に定年が延びましたけども、実はこれはある年の日本の平均寿命なんです。いつだと。

1950年。1950年は、人は60歳で死んでいたのです。正確に言うと、男が59歳で、女性が61歳。60歳で亡くなっていた。ということは、今日、会場を見回すと、既にあちらの世界に行かれた方がたくさんいるわけです。それを、60歳が平均寿命というのをあらわすのは、わかりやすい事例は、『サザエさん』の波平とフネ。波平はおじいちゃん、フネはおばあちゃん、の年齢。波平とフネは幾つぐらいだと思いますか。おじいちゃんとおばあちゃん。どうでしょう。何歳ぐらい。

正確に言うと、波平が設定時54歳、フネは52歳。だから、非常に近いところをいっています。すごくおじいさんとおばあさんに見えますよね、波平とフネって。今でいうと多分、それこそ60歳や70歳に見えますけども、当時の54歳、50代はそうだったわけです。でも、今の54歳、52歳、もっと若いでしょう。じゃあ、今の54歳から52歳にはどういう人がいるかということ、例えば俳優でいうと、渡辺謙と、真田広之と、歌手の玉置浩二とか、俳優のトム・クルーズ。女性でいえば、黒木瞳、松田聖子、それから叶姉妹。もし叶姉妹と玉置浩二がフネと波平をやったら、結構違和感あるじゃないですか。でも、高齢社会というのは、前向きに考えれば、元気でアクティブな社会だと。そういう発想が大事だということでございます。

今日、人生二期作・二毛作という点でお話しいただきます。今日はこの4人のスピーカーの方、私がこれまで仕事で接していて、将来こうなりたいなという方々のお話です。それは、人生二期作、同じことの延長線もあれば、二毛作、全く新しいこともあるし、そのミックスもあります。それぞれにやはりストーリー性があると思うんです。ですので、今日この後、それぞれのスピーカーから15分ずつぐらいお話をいただいて、まず前半はそれを進めたいと思います。

じゃあ、最初は白井さんですね。よろしくお願いします。改めてもう一度拍手でお迎えください。

【白井】 僕、今、波平と同じ年です。54歳で、もうすぐ誕生日で55歳になるんですけども。

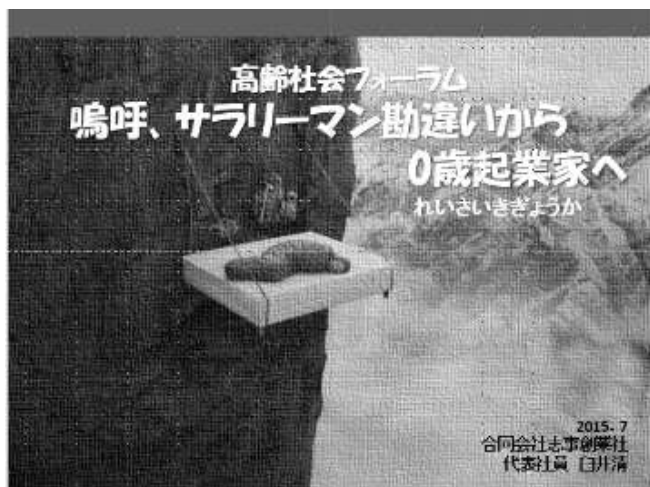
お時間いただいて、少し私の経験談みたいな話になりますが、もし参考になればということでお聞きください。

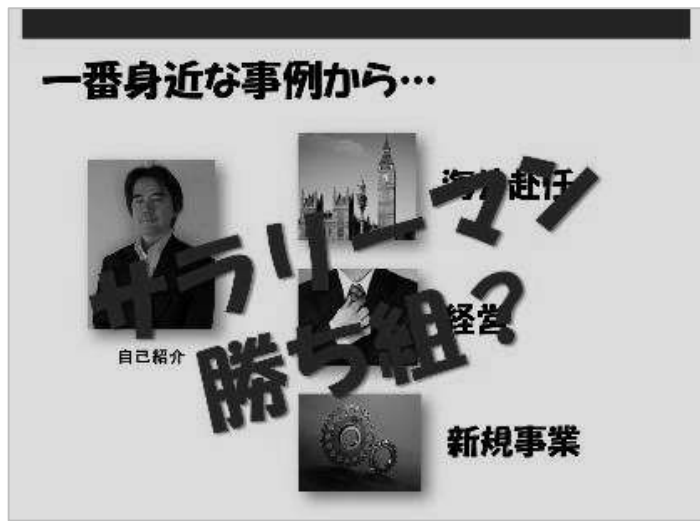


### ●サラリーマン時代 上場会社の最年少部長として

私30年サラリーマンやっていました。皆さん、サラリーマンの印象というのはどんな感じでしょうか。

私、すごく衝撃的な言葉に出会ったことがあります。それは小学校の低学年の女の子が、サラリーマンの印象はと聞いて、こう答えたのです。「真面目にこつこつやって、いつかリストラされる人」。これを聞いたとき、私は本当にショックを受けて、ただ、ショックを受けたんですけど、俺は違うなと。そのとき、現役ばりばりサラリーマン。なぜ違うかと。俺はね、格好いいサラリーマンだと思っていたのです。本当です。ちょっとお聞き苦しいんですが、ちょっとだけ聞いてください。私の当時サラリーマンとしての自己紹介を今、させてください。まず、海外赴任を経験しておりまして、アジアに始まり、例えばヨーロッパですとロンドンですとかミュンヘンに赴任していたと。ちょっと格好よさそうじゃないですか。結構若くして、自分で言うのも恥ずかしいですが、一部上場ですよ、40代の、しかもワールドワイドの8万人以上の会社の最年少部長に当時なりました。経営。しかも、新規事業。これを任せられちゃって、ヒット商品を飛ばしたと。嫌になるぐらい格好よくありませんか。全然格好よくないですね。私は格好いいとっていましたし、私、サラリーマン勝ち組なんじゃないかと。いつかリストラされる人、あり得ないと思っていたんですが、世の中、そうならないんですね。本当に社内失業になりました。



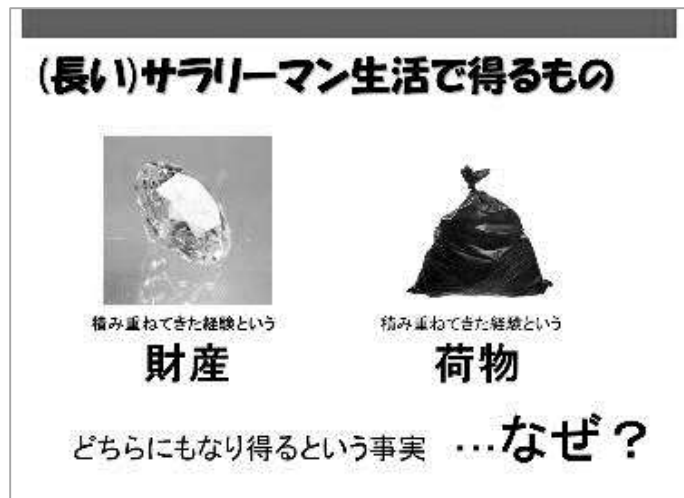


●社内失業にあって

あのときのあの専務に楯突かなければよかったとか、あのときのあいつの失敗がなければ、俺は今でも大丈夫だったんだとか、いろいろ人のせいにしていたんですけど、ともかく格好悪いなと思いました。社内失業しちゃったんだ、俺とか。

しばらくは人のせいにしていたんですけど、社内失業すると社内の中で時間がいっぱいあるので、いろいろ考えていたんです。1つ、私自身でわかってきたんです。どうやらちょっと違うかなと。

皆さんも、今日、会場の半分以上の方がサラリーマンだったり、サラリーマンでいらっしゃるということなんですけれども、やっぱり長い間働いていると、実はすごく得るものがあるんです。これは積み重ねてきた経験ですとか、これはネットワークも人脈とかも含めてですけれども、ものすごくきらきら輝く、本当にダイヤモンド、財産だなど改めて私は思いました。社内失業中に。



●社会と交わるチューニング機能

もう1つ、思ったんです。同じなんですけど、積み重ねた経験と価値観がお荷物になっちゃっている場合もある。これは不思議だと思って、何でこうなっちゃったんだろうと。経験は皆さん同じようにお持ちなんですけど、すごく財産として使っている場合もあれば、荷物になっちゃっている場合もある。何でだろうと思って、これまたちょっと考えたんです。昼間、することないですから、考えていました。気づきが1個あったんです。それは、チューニング機能と書きましたけども、いろいろな社会に様々に交わる力というのが、会社生活が長くなっているうちに衰えてきているんだということに気づいたんです。

なぜかという、会社の中でしかわからない用語とか、皆さん、いっぱいありませんか。会社の中としか話していないときって結構ありませんか。そうすると、A会社、B会社という会社の周波数でしか動かなくなっちゃうんです。ほかの周波数にいつちやうと、全然何言っているかわからないし、全然感じないということになってしまっ、いつの間にか、これ、衰えちゃったんじゃないかなど。

Salaryman poster with a radio tuner image and text: **サラリーマン人生を通じての気づき**, **チューニングの機能 社会とさまざまに交わる力**, **衰え**, **リハビリの機会を意識して持つ 「社会」と触れ合う!**

社会人になったはずなのに、会社人になっちゃったという感じなんですよ。これをすごく感じまして、社内失業したおかげで私はそのことに会社にいる間に気づきました。

それで、これはリハビリの機会を意識して持とうと。チューニング機能を復活させようと思いました。チューニング機能が衰えているだけで、決して使えないわけではないんですね。すごくラジオもいい音を出したりですとか、すごく素敵なデザインだったりとか、それはそのまま使えるんだけど、たまたまほかの周波数に合うことができないだけで使えないという、それが先ほどの荷物のたとえです。

●もう一つの居場所

それで、社会と触れ合うといってもなかなかいきなり難しいんですが、ここ、英語で3rd Placeと書いてあるんですけど、大人の部室と私は勝手に呼んでいますが、大体この2つなんですね、サラリーマンは。左側にあるのは職場、右側にあるのが家庭。この2つ、ファーストとセカンド。どっちがファーストかわかりませんが。ここで、例えばですけれども、そろそろ会社辞めちゃおうかなというときに、会社の中で相談できるかと。

3x3 Labo poster with text: **「大人の部室」(3rd Place)の勧め**, **3x3 Labo**, **2014.10.30 OPEN**, **「社会」と触れ合う!**

あるいは、家の中で相談しようと。奥さんが要らぬ心配をしまして大変なことになる。いやいや、ちょっと辞めようかなと言っているだけで、辞めるとはまだ言っていないよなんて大変なことになっちゃう。と考えると、もう1つの場所があってもいいよねと。そういうことも含めて、どこの時間、場所、どんな人と会うかということで、もう1つ別の場所を設けるといいかな、そこで社会と交わればいいかなと思いました。

多分、後ほどのディスカッションとかでもお話しするので、詳しくはここではしゃべらないんですが、私は例えばこういう場所を使いました。これは丸の内、ここから歩いてすぐのところにもあるんですけども、3×3 Laboみたいな、そういうスペースがあります。これは名前を覚えていただかなくてもいいです。ここにいろいろな人が集うので、そういうところに行ってみるというだけでもいいかもしれません。

## ●いよいよ起業へ！

それで、結果的にこの部活をやってチューニング機能が少しずつ戻ったんじゃないかなと思うんですけども、結構おもしろくて、これは笑うところなんですけど、若気の至りで、53歳のときに、よく読むとどこの会社かわかるんですが、従業員1万人超、これは国内ですけど、大企業勤めを辞めて、代表兼従業員1人の零細企業を立ち上げました。0歳起業です。



初めて笑いが。よかった、よかった。

ここからは、よく聞かれました、今でも聞かれるんですけども、よく起業なんて思い切ったことしましたねと。僕もそう思っていたんです。何で起業しちゃったのかなというぐらいなんですけど、しちゃうと、どうってことないなというのはあるんですが、実はする前とした後で全然違ったので、その話を最後のほうにしたいんですけども、起業前のイメージというのは、やっぱり自分もオフィスにいたので、こんなようなことをずっとやっているのかなと思っていたんです、正直言って。どちらかと言うと、黙々と仕事をするみたいな感じですよ。実際は、景色が全然違いました。これは私のもといいた会社の地元の本社がここ出身の会社だったんです。長野県なんですけれども、長野県の善光寺というところの桜がすごくきれいに咲いているのを、辞めてから気づきました。



## ●社会とどんどんつながる

それまでは全然わからなかったです、見たはずなのに。すげえきれいとかと思って、これはそのときに撮ってきた写真です。見えている景色が全然変わるんだなという。起業前と起業後ですね。会社卒業後という言い方でもいいかもしれません。それからもう1つは、起業前のイメージというと、すごく、悲壮感とまでは言いませんけれども、孤独に耐えて頑張らねばならぬというイメージを持っていた。24時間働けますかみたいな感じ。ちょっと古くてあれですかね。なんて感じだったんですけども、全然違って、会社にいるとき以上に、社会と交わっちゃっているせいもあるんですが、いろいろな人とどんどん出会っています。びっくりするぐらい。

右下のものはいわゆる女子会ですよ。女子会に自分が参加させていただけるなんていうことは、これは夢のような話ですけども、実際呼ばれましたとか、あるいはサメの街の気仙沼というところを今応援しているんですけども、そんなようなことも一緒にやったりとか、ともかくどんどんつながっちゃって、孤独でやっているなんていうことはあり得ないなど。起業したからこそチーム力かなぐらいのことを今感じています。



もう1つは、起業すると、自分の今までため込んでいたものを1滴1滴絞り出して、何としてでも生き延びるみたいな、そんなイメージを僕は持っていたのです。今持っているものを何とか小出しにして長らえるみたいな。

これも全然違いまして、これは人に会うわけで、いろいろなことを教えていただいたりということがメインになりますけど、どんどん自分の中の広がりが出てきて、自分の中にある可能性が本当に、無限大なんていうことは格好よ過ぎて言いませんけれども、まだまだいけるじゃんというのがすごくわかります。